

# 昭和戦後期の日本人と米国人宣教師間のアンビヴァレンス

——ビックスラー宣教師夫妻と政治家山崎猛一家との関わりを中心に——<sup>1</sup>

小幡 幸和

## 1. はじめに

キリスト教を伝えるために文化の境界を乗り越える宣教師と、その宣教師を受け入れる現地の人々との関係は得てして複雑なものとなる。宣教学や宣教師史研究においては、複雑さの中にもいくつかのパターンがあることが指摘されてきた。そのパターンの一つが宣教師側の父権主義 (paternalism) である。父権主義の問題点の一つは、教理や教会制度の主導権を現地の人々に委譲しないことである。さらに深刻なのは、経済的便宜を図る西洋の宣教師とそれを感謝して受ける非西洋の現地人という図式が固定化することであろう。換言すれば、父権主義を維持する共犯関係が生じてしまうことが大きな問題点であると指摘されてきたのである<sup>2</sup>。一方、西洋人による過去の宣教活動への反発から、宣教師の受け入れ自体を拒否する声为非西洋諸国のキリスト教界から上がることもある。とりわけ1960年代以降の脱植民地化の流れに触発された時期は、「宣教師は自分の国に帰れ! (Missionary, Go Home!)」を合言葉に宣教のモラトリアム (西洋からの宣教師派遣の停止) を訴える動きが非西洋世界で高まったのであった<sup>3</sup>。

一方、ポストコロニアル批評の知見は、父権主義的な宣教師に対する単純な依存や反発という枠に収まらない可能性が宣教の受け手にあり得ることを明らかにしてきた。例えば、ホミ・バーバは『文化の場所：ポストコロニアリズムの位相』の中で、キリスト教の神について伝えようとする宣教師とインドの巡礼者が会話するエピソードを紹介している。この会話の中で一見丁寧な言葉遣いで宣教師に接するインドの巡礼者であるが、それでいて彼の言葉は宣教師の言説に絡み取られてしまうことはない。逆に、インドの宗教性へと話を転換させることで宣教師を当惑させるのがこのエピソードのポイントである。バーバによれば、キリスト教宣教師はそのような態度について「こずるい礼節をよそおってわからないふり」をしているとか、「のりくらりとかわして」いると嘆くしかないと言う<sup>4</sup>。バーバが引用したのはキリスト教宣教師の描く物語を現地人が巧みに転覆させる例であろう。一方、完全に転覆させないまでも、宣教の受け手側が、宣教師の描く物語を受け入れた振りをする、あるいは「のりくらりとかわす」ことは決して珍しくないと思われる。

本稿では、キリスト教宣教師と宣教師を受け入れる側の関係性を、昭和戦後期の日本を例に考察する。ここで問うのは、1950年代の日本において米国人宣教師と交流を持った日本人、とりわけ宣教師の経済的支援を受けていた日本人キリスト者が、自らと宣教師の関係をどのように受け止めていたのであろうかという問いである。

具体的には、米国で起こったプロテスタント刷新運動の一つであるストーン=キャンベ

ル運動<sup>5</sup>から派生した「キリストの教会」によって戦前に日本に派遣され、戦後再来日した宣教師オーヴィル・D・ビックスラー (Orville D. Bixler, 1896-1968) とその後妻ディライラ・ベス・ビックスラー (D'Lila Beth Bixler, 1896-1970) を取り上げる。オーヴィルは1919 (大正8) 年に前妻のアナ (Anna) と共に来日して東京に滞在した後、1922 (大正11) 年から茨城県那珂郡塩田村長沢 (現・常陸大宮市) で宣教を開始し、1938 (昭和13) 年に帰国するまで茨城で宣教活動に従事している。1947年にアナが死去した後、1948年に再婚したのがディライラであった。オーヴィルとディライラは1950 (昭和25) 年に来日し、東京の御茶の水キリストの教会で宣教活動にあたった他、1951 (昭和26) 年からオーヴィルが理事長を務めていた啓明学園 (東京昭島市)<sup>6</sup>において宣教・教育にあたった。戦前から活動していたために流暢な日本語で日本人を惹きつける力があつたオーヴィルに加え、米国で音楽の教員や学校の管理職を歴任しこまめに手紙を書くなど優れた対人コミュニケーション能力を身につけていたディライラは、教会と学校という二つの活動を遂行する宣教師夫妻として適任であったと言える<sup>7</sup>。

ビックスラー夫妻との関係において本稿で取り上げるのは、茨城出身の政治家・山崎猛とその家族、とりわけ息子の光三郎である。資料としては、茨城県立歴史館所蔵「山崎猛関係資料」に含まれている、ビックスラー宣教師夫妻に関連した手紙等を主に用いつつ、他の文献資料を補足しながら宣教師と受け手との関係を検証していく。

以下では、まず山崎猛とその息子・光三郎とキリスト教の関わりを概説した後、光三郎が留学先の米国でビックスラーとの関係性を深めていく様を記していくこととする。

## 2. 山崎猛とその息子・光三郎

山崎猛 (1886-1957) は茨城出身の政治家で、1920 (大正9) 年に立憲政友会から出馬して初当選して以来、生涯を通して衆議院議員を10期務めた他、第二次世界大戦後の1946 (昭和21) 年に衆議院議長、その後自由党幹事長、運輸大臣、経済審議庁長官等を歴任した人物である<sup>8</sup>。また、連合軍占領下の1950 (昭和25) 年に米国議会制度視察をした渡米議員団団長を務め<sup>9</sup>、1957 (昭和32) 年に農地関連三団体が合同することで発足した全国農地解放者同盟の初代会長に就任<sup>10</sup>している他、社会福祉にも高い関心を持つ政治家であった。

政治家としての山崎猛の生涯、とりわけ1948 (昭和23) 年に山崎が首相になる可能性があつた一連の政治的動き (山崎首班工作事件) については茨城県近現代史研究会会長を務めた市村真一による分析がある。山崎猛の子孫のもとに残されていた資料をもとに分析を進めた市村は、山崎家の家譜をはじめ、社会的弱者への愛情といった山崎の人間性の一端も明らかにした<sup>11</sup>。市村が言及している資料群については、その概要や資料入手の経緯に加え、山崎猛が自由党幹事長時代を中心に吉田茂と交わした書簡の中身についても茨城県立歴史館主任研究員であった石井裕が「資料紹介」としてまとめている<sup>12</sup>。

山崎猛は11歳で上京しているが、東京で通った麻布中学で出会ったのがキリスト者でもあつた江原素六であつた。麻布中学の起源はミッション系の東洋英和であるが、ミッションから独立した麻布中学ではキリスト教教育は行われていなかった。しかし、キリスト者である校長の江原は、修身の時間に聖書に言及することがあつた。また、江原が住み麻布中学の生徒も受け入れていた東洋英和の寄宿舎では、江原による聖書講義が毎日行われた

という<sup>13</sup>。山崎猛の中学時代を知る人物は、山崎猛について「江原素六翁の感化を受け、常識の発達した円満なる人格を備ふるにいたった。精神的に、物事を考慮判断し、人に接するに愛をもってし、友情に厚く、また周到懇切であった」と記している<sup>14</sup>。

山崎が受けた江原素六からの感化には、間違いなく聖書の教えも含まれていた。「山崎猛関連文書」に含まれている山崎猛手書きメモには、以下のような記載がある。

一九四九年十月十六日（日曜）シオン学園に於てDr. マクミランの帰米送別会を催さる。其朝の一時私は例の如くバイブルを読む。開巻図らずも約翰傳第六章であった。その二六、二七節に左の如くあった。・・・〔ヨハネによる福音書6章26節-27節引用<sup>15</sup>〕・・・私は、何人の指導も受けずに独自の見解でバイブルを毎日読んで居る。年齢二十才の頃、バイブルクラスで夏の朝、十分間ずつ江原先生より講義を聞いた。それが動機で、独自で読んだ。勿論その後も折にふれて読んだ。・・・終戦の後、改めてバイブルを開いた。此時は年齢六十を超えた。四十年の社会的経験を経た後であった。私のバイブルを読んだの感謝は実にスバラしさを痛感して居る<sup>16</sup>。

ここで言及されているマクミラン（E.W. McMillan）は茨城キリスト教学園の初代総長を務めた人物で、米国「キリストの教会」の著名な説教者・指導者でもあった。マクミランは米国への帰国後に日本宣教について記した文章の中で山崎猛に言及し、日本滞在中に山崎と交わした長い会話の内容を述懐して記している。その記録によれば、山崎は20歳の時よりも60歳になって改めて読む聖書の言葉により重みを感じていること、さらにはキリスト教の洗礼を受けたい思いがあることを語ったという<sup>17</sup>。

息子の山崎光三郎は、戦後間も無く、結核で臥していた時に訪問を受けてビックスラーと知り合い<sup>18</sup>、後に御茶の水キリストの教会で受洗、さらにビックスラーの勧めもあり米国の「キリストの教会」系列大学の一つであるジョージ・ペパダイン大学（カリフォルニア州ロサンゼルス）に留学している。山崎はその留学にあたって当初は鈴木通夫と行動を共にした。鈴木通夫は現在の茨城県那珂市額田でチルドレンズ・ホーム<sup>19</sup>という名の児童福祉施設を設立・運営していたキリスト者で、ビックスラーを通して御茶の水キリストの教会や山崎光三郎ともつながっていた<sup>20</sup>。鈴木通夫の記憶によれば、光三郎を連れて留学に共に行ってくれと山崎猛が鈴木通夫に頼んだという<sup>21</sup>。

山崎光三郎と鈴木通夫が留学のために渡米したのは1955（昭和30）年9月のことであった。山崎光三郎が知人に送ったと思われる葉書サイズの留学通知には以下のような記載がある。

恩師O.D.ビックスラー先生御夫妻の特別の御援助と米国国会議員V.ウィクシャム氏及び国際キリスト教指導者会議の招待を戴き約二カ年・・・ジョージペパダイン大学に留学、後一年間米国各州の宗教社会事業施設を視察する予定にて今月28日〔1955年9月28日〕IKK国島丸にて東京港出帆致す事になりました<sup>22</sup>。

また、1955年10月22日付のジョージ・ペパダイン大学学生新聞『グラフィック』（Graphic）には、山崎光三郎と鈴木通夫が留学生として入学したことが以下のように記されている。

日本の茨城にある孤児院の創立者であり代表でもある鈴木通夫氏と、教会の奉仕者であり、青少年のリーダー、そして衆議院議員の元秘書でもある山崎光三郎氏が日曜日、日本から到着し、ペパダイン大学に入学した。

光三郎は、日本で最も影響力のある地位の一つである衆議院議長の息子である。彼は東京にある早稲田大学と慶應義塾大学という日本で最も有名な私立大学で政治学と経済学を学んだ。今は牧師になるためにキリスト教を学んでいる。

・・・孤児院を設立してまもなく鈴木通夫は「キリストの教会」の宣教師であるオーヴィル・ビックスラーと、その妻でペパダイン大学の元学生部長（registrar）でもあるディライラ・シムコックスと出会った。ビックスラー夫妻を通してアメリカの教会関係者からこの孤児院への支援金が送られ、鈴木氏もペパダイン大学のことを知るようになったのであった。・・・通夫と光三郎は、この大学で三年間学び・・・日本に戻ってから孤児院での役割を再開し、教会で牧会にあたる予定である<sup>23</sup>。

ジョージ・ペパダイン大学は、二人が留学した当時はロサンゼルス市の市街地にキャンパスを構えていた（1971年に現在の「ペパダイン大学」に改名し、1972年に現在のマリブ市に移転している）。ロサンゼルス市は、中心部であるダウンタウンはあるものの、基本的には広大な地域に市街地が広がっているため市内全域が人口密集地域というわけではない。そのせいもあってか、東京の五反田で育った光三郎にはロサンゼルスは田舎に見えたようであり、この時期に両親に宛てた絵葉書には「町中も幾度も歩きましたが道路以外は東京の方が立派です。併し人間が少なくのんきですが・・・（町に）深みはないようです」と記されている<sup>24</sup>。この大学に滞在している間、山崎光三郎は多くの手紙や絵葉書を日本の両親に送り、日本とアメリカを頻繁に行き来していたビックスラー宣教師夫妻と共に活動することも多かった。そこで、以下ではとりわけ山崎光三郎がビックスラー夫妻とどのような関わりをもったのかを検証していくこととする。

### 3. 山崎猛夫妻・光三郎とビックスラー夫妻の関係性

ここでは、主に「山崎猛関係資料」に含まれる書状・絵葉書等を通して、山崎猛一家とビックスラー夫妻の関係を検証する。中心になる資料はビックスラーの支援によって米国のジョージ・ペパダイン大学に留学していた際に山崎光三郎が日本の両親に送った手紙であるが、光三郎がビックスラー夫妻に出した手紙やビックスラー夫妻が山崎猛夫妻に出した手紙類も含まれる。

#### 1) 山崎光三郎が見たビックスラー夫妻、ビックスラー夫妻が見た山崎猛

日本の知人に出した留学通知の葉書ではビックスラーに関して「先生」、「恩師」、「御援助」との言葉を用いていた山崎光三郎であるが、米国に到着してすぐに両親に送った書状では、現地に着いた後に分かったビックスラーへの懸念を以下のように記している：「当地の教会には数ヶ所に出て見ました。教会の牧師は大体ペパダイン・カレッジの教授がやっているので我々をよく遇してくれます。しかしビ氏に対する評判は好くはありません。日本の牧師から悪いレポートが来ている事は事実の様です」<sup>25</sup>。ここでは、ビックスラーを「先生」ではなく、「ビ氏」と表記している点にも留意する必要がある。

「山崎猛関係資料」に含まれる光三郎の手紙類だけに関して言えば、頻繁に両親宛の手紙を出していた光三郎が、その手紙の中でビックスラーのことを「ビ氏」ではなく「ビ先生」

と記し始めるのは留学開始から約半年後のことであり、それはビックスラー夫妻の入院を両親に報告する際のことであった：「ビ先生夫妻は今手術にて入院中です。術後は両方共良好の様です」<sup>26</sup>。その後に光三郎が両親に宛てた手紙の中では、「ビ氏」・「ビ先生」の呼称が混在している。

また、光三郎は両親への手紙の中でしばしばビックスラー夫妻の性格、とりわけ彼が問題と感じている面についてもあからさまに記している。例えば、光三郎が渡米して約一年経った頃、当時60歳近かったオーヴィル・ビックスラーについて、「ビ先生の性格的な欠点も近頃強くなって彼もなかなか子供のようなビ先生夫妻の安置に苦労している様子です」<sup>27</sup>と記しており、不満が募っていた様子が窺える。

留学も後半に差し掛かっていた時期に光三郎が両親に送った手紙には、ビックスラー夫妻がいつも喧嘩をしていること、そしてむしろ自分が二人のことを世話する必要があると考えていたように思われる、以下のような記述がある：

〔ビックスラーが〕ミセスと絶えずつまらぬ口喧嘩をしている様子は、全く神経衰弱としか思えませんが、小生一切取り合はず、両方の話を聞いてやっております。結局、ミセスは東京に少なくとも健康的なビルディング、教会が建てられねば日本に住むのはいやだとの事で、ビ先生は、そんな事をしては批判も高くなるだろうと、又牧師の取換等やられては大変と、先生一流の恐怖感から消極論を説いております。どちらも子供の様な感情を持っておられますので、なだめ乍ら強引に切張っていく他ありません。結果さえ良ければ、大満足なのですから<sup>28</sup>。

この中で言及されているのは、ビックスラーが宣教師として仕えていた東京御茶の水にある教会の建物建築に関する議論である。この手紙の時点から約2年半後の1960年にはテナント用のスペースも含めた地下1階地上6階の建物が完成しているが、大きな建物を建てるのに反対していた（オーヴィル）ビックスラーに対して、妻のディライラは賛成の意見を持っていたようである。上記の手紙からしばらくして光三郎はビックスラー夫妻と共にロサンゼルスを出発し、全米17州を車で周って宣教の報告をする旅に出ているが、その車中でも同じ話題が繰り返された。光三郎は、両親に宛てた手紙の中でその際の会話の様子を以下のように記している：

車中色々日本での仕事の話が出来ましたが、ミセスは東京に寒暑に耐えうる家が無ければ日本に帰れないとの事で、経済的自立の為にもぜひビルディングを建てたいと主張し、B先生はこのビル建設には全く臆病で一つには米国の教会人から金もうけをした様に思はれはしないか、又一つには教会を他人に乗取られないか等々で、・・・おじけ気味です。B先生の育ったインディアナ州の村にも行って見ましたが、これこそアメリカの天下野高倉と云う所で、この様な寒村で育ち、塩田村の長沢に廿才前後で入り込んだのですから本当のカントリー・マン（田舎者）、急に派手な仕事は何とも恐ろしい様子です<sup>29</sup>。

一方、ビックスラー夫妻が山崎猛夫妻に宛てた手紙等をみると、山崎猛と夫人に対してビックスラー夫妻が細やかな配慮を欠かさなかったことが浮かび上がってくる。衆議員議長まで務めた山崎猛に対して、ビックスラー夫妻がかなり気を遣っていたとも言えるであろう。その理由の一つと思われるのが、ビックスラー夫妻の方が山崎猛に依存していた部

分がある点である。例えば、ビックスラー夫妻が日本とアメリカを船で往復する際には、船便を運営していた日本の船舶会社から予約を取るために、日本にいる山崎猛に予約を依頼するのが少なくとも光三郎の留学時には常になっていたようである。光三郎の方でも、それらの船舶会社の米国支店で予約の確認をする、ということがあった。渡米してまもない光三郎が1955年11月に両親に送った手紙には、この点においてビックスラーの方が山崎猛に依存する側であったことを示唆する以下のような記述がある。

ビ氏の船の件は如何でせうか。彼からの手紙では可能性が薄いと云う様な悲観的文句ですが、出来たらなんとかして下さい。彼は臆病で自分で直接お父さんに電話もかけられない位ですし、又話が出来なければ自分一人達観して頭を抱えてしまう性格ですから、時々電話をかけて声を聞かせてやって下さい。彼は十一月末か十二月初め、帰米する様な事を云ってしまった為、船が出来ねば帰れず、困っているらしいのです<sup>30</sup>。

翌年の6月13日に光三郎が両親に送った手紙には、日本へ渡航する船を探すビックスラーの気持ちが次のように叙述されている：「ビ先生としては、一日も早く帰京したく、従って六月二十四日、ロス発のウメ丸に是非と云う事です。・・・昨日当地の三井船舶支社（agency）に問合せました」<sup>31</sup>。ここで「ビ先生としては」と取って記されているのには理由がある。それは、夫人のディライラ・ビックスラーの方は日本から米国に戻った際に米国での滞在を満喫しており、できるだけ宣教地である日本に戻る日程を遅らせたいと思っていたからである。そこで、先ほどの手紙から二日後には以下のように光三郎が記している。

ビ先生は帰京を急がれたのですが、ミセスが如何してももう一廻旅行したいと言い出し、ビ先生も出来ればもう一息運動を徹底したいと言う気になって、もしゆるされたら七月十七、八日頃ロス発の青葉山丸をお願いしたいと申します。当方であつてに船を換える事はまずいと思うのですが、御面倒でも会社に聞いて戴かせようか<sup>32</sup>。

さらに、4日後の6月19日に記された光三郎の手紙は以下の通りである：

ミセスは少しでもゆっくりアメリカに居りたいので、八月以後を望んでいます、そんなに手数変更ではたまりませんので、松盛丸が客室確保されている限り、之に決定し乗船する事になります。・・・変更ばかりで三井本社とも御連絡とりにくい事と存じますが、又お願い致します<sup>33</sup>。

ビックスラー夫妻が山崎猛夫妻に敬意を表しており十分に配慮したコミュニケーションを取ろうとしていたことは、ビックスラー夫妻が山崎夫妻宛に出した手紙やカードの言葉からも見て取ることができる。夫人のディライラが記したと思われるビックスラー夫妻から山崎夫妻に宛てた1956年年末のクリスマスカードには、丁寧に言葉を選びながら、短いながらも十分な配慮があったことを想起させる次のような言葉が記されている：「私たちの最愛の山崎御夫妻へ キリストがもたらす平和と希望と幸せが、あなたがたの心にもありますように。あなたがたのことを心から愛し続けます。お二人にお目にかかる機会がもっと多ければと願っています」<sup>34</sup>。また、ディライラ・ベス（ビックスラー夫人）が山崎猛夫妻に送った手紙には「ポール〔光三郎のアメリカでのニックネーム〕はとても元気で幸せに暮らしているようです。彼は私たち夫婦にとって息子のような存在です」<sup>35</sup>と、

山崎夫妻を喜ばせたであろう言葉が満ちている。さらに、光三郎が両親に出した絵葉書に付け足す形で（オーヴィル）ビックスラーが記した記述には、「彼〔光三郎〕は本当に最高に素晴らしいクリスチャン的性質を持っています。人は、彼を知れば知るほど彼を愛するようになります。ですから、彼はアメリカにたくさんの友人がいるのです」と記されていたのであった<sup>36</sup>。

## 2) 山崎光三郎とキリスト教の学び：ビックスラーの期待と自己の願望の相剋

山崎光三郎のジョージ・ペパダイン大学での専攻はキリスト教（聖書学）であり、その学びは実質的にはキリスト教教職者（牧師）養成課程と言えるものであった。ビックスラーはそのこともあって光三郎の支援をしていたと考えられるが、実は光三郎自身は必ずしも教職者になるつもりがあったわけではなかった。その頃、大学全体で合計100人程いた外国人留学生の中で、キリスト教専攻の学生は光三郎だけであった。そして、キリスト教専攻である自分は毎週教会の礼拝に通っているにもかかわらず、留学生の大半は普段教会に通っていないという状況があったようである。光三郎がビックスラー夫妻に宛てた手紙によれば、どうすれば他の留学生が教会に通うようになるかを大学の教員兼牧師と二時間も語ったこともあったという<sup>37</sup>。つまり、牧師になるつもりはないとは言え、キリスト教専攻であるという自らの状況に適宜順応し、教会活動も行なっていたのである。例えば、ウェスト・ロサンゼルス地区にある教会でビックスラーの日本における活動について光三郎が発表する機機があった。その際、教会など来たことがない近隣の日系人16名を教会に招いたことを、当時日本にいたビックスラー夫妻に宛てた手紙に記している<sup>38</sup>。

ジョージ・ペパダイン大学卒業後に牧師になることを目指しているわけではないことは、アルバイトで給料を得ていたことと同様に、光三郎にとってはビックスラーに話しづらいことであったと推察される。しかし、両親に対しては、将来に関する自らの思いを繰り返し記していた。具体的にはジョージ・ペパダイン大学卒業後に米国東部の大学院に進学することが光三郎の願いであったが、そのための準備段階としてペパダインで学んでいることは無駄ではないとの考えも光三郎には見られた。1956年12月に両親に出した手紙には、そのことが記されている：

英語勉強には今のところ何が専攻でも同じですので、このままペパダインを卒業して義理をすましたいと思います。・・・ペパダイン卒業後はビ氏からの援助期待出来ませんので、近く東部・・・各大学の外国人学生用スカラーシップや、生活費等調査中です。鈴木やビ氏からはカレッヂ卒業したら直ぐ帰って来てくれとさわがれますが、やはり田舎のカレッヂでの中途半端な英語で帰っても役に立ちません<sup>39</sup>。

両親に対する同様の説明はその後も繰り返され、例えば1957年3月の手紙では、より具体的に、ジョージ・ペパダイン大学卒業後は「東部の大学で社会保障制度でも勉強する予定です」<sup>40</sup>と両親に伝えている。つまり、両親に話す内容とビックスラーに話す内容が違っていたわけであるが、そのことのみで光三郎を責めるのは早計であろう。そもそも、両親にしてもビックスラー夫妻にしても、光三郎は支援を受けている側であった。しかも、光三郎は独りで異国に留学して勉学に加え経済的やりくりをする必要があったわけで、大学

院に進む夢を持っていたとすれば尚更のこと、少なくとも現在受けている支援を不用意に減らしたくないという思いはあったであろう。また、日本にいる両親に対しては、米国での生活が米国人キリスト教徒のみの援助によって成り立っていることはあまり言いたくなかった可能性もあろう。

両親に対する説明とピックスラー夫妻に対する説明が違うケースは他にも存在した。それは、渡米してから一年以上経過した後ようやく入手することができた自動車の入手経路の説明であった。1956年12月27日に両親に宛てた手紙では、「偶然逢った日本人の祖父母」が世話してくれたことで、1948年製のダッジを150ドルで入手できたと記した光三郎であった<sup>41</sup>。しかし、その後すぐの1月8日にピックスラー夫妻に宛てた手紙の中では、同じ車を同じ値段で探してきたのはアメリカ人クリスチャンであると記されている。しかも、探したのは、元在日宣教師でピックスラーとも旧知の中で当時ロサンゼルスに住んでいたE. A. ローズと、大学が名を冠している人物の息子であるジョージ・ペパダイン、Jr. であった。光三郎は、車の入手経緯に関するピックスラーへの説明で二人の米国人の名を出すと共に、その車が見つかったことが神の意思と感じたとまで記している<sup>42</sup>。

そうしてみると、そもそも光三郎はアメリカ人や社会一般、あるいはアメリカ人クリスチャンのことをどう見ていたのであろうか。光三郎が留学して二年目にピックスラー夫妻に宛てて書いた手紙では、アメリカ社会におけるキリスト教の影響が偉大であることを次のように記している。

私はアメリカのキリスト教について、また真のキリスト教についてわかるようになってきました。アメリカ史の授業は大変興味深いものでした。アメリカの人間観、気質、向上心といったものがよくわかりました。そして、300年前にメイフラワー号が辿り着いて以来のアメリカの歴史が、いかに偉大なキリスト教の影響を受けているのかも理解しました<sup>43</sup>。

もっとも、光三郎はアメリカ人クリスチャンの人間性の良さは認めていたものの、自分自身の関心と照らし合わせて、社会問題への関心がアメリカ人クリスチャンに薄いことを指摘して嘲笑していることもある：

結局アメリカの教会は金にこまらぬ連中の親睦の場と云う事で、それ以上深刻な中味はなにも無いのがわかって来ました。確かに全くの善人ばかりの集まりですが、積極的な社会救済意欲など全然無い様です。小生が日本の実情的窮乏の話、道飽和人口の話等しても同情してくれますが、結局は他人の国の事の様です。(しかし)一人一人全く悪意の無い人間です。小生も、あまり空想的な聖書を説く牧師にはとてもなる気はありませんし、又なれませんが、之等善意の連中と連絡をとって本格的に現実的社会事業家になってみたいと思っております<sup>44</sup>。

当時のアメリカ人クリスチャンを嘲笑するような姿勢はともかく、ここに示唆されている光三郎のアメリカ・キリスト教批判自体は、正統的キリスト教信仰に照らし合わせても、また当時の日本で良く知られていた賀川豊彦といったキリスト教社会運動家の精神を鑑みても、至極当然の内容と言える。つまり、光三郎がただ単に牧師になることを避けたいという浅はかな思いのみにとらわれていたわけではないことを、この引用が示唆しているといえよう。

### 3) 光三郎の留学費用支弁と支援者ビックスラーの経済状況

ビックスラーが船の予約について心配していたことを前述したが、光三郎自身がビックスラーに関して心配していたのは、ビックスラーが担っている自分の留学費用支弁のことであった。そのため、ビックスラーの経済状況が良くないと噂は光三郎をとりわけ不安にさせたようで、渡米間もない頃に両親に宛てた手紙には以下のような記述がある。

教会も、啓明〔学園〕も、色々容易でなく、経済的にもつまって軽井沢の家を売るさわぎを〔ビックスラーが〕していますが、万一当方への送金が止まりでもしたら、未だ体制も整っていませんのでそれこそ大変ですし、・・・心配です。・・・金には徹底してセチガライ、ロスの米人を見て、ビ氏が送る百ドルも何時まで〔見込めるか〕安心は出来ませんし、急に他のスポンサーも見つかりませんので、そろそろアルバイトも考えて見ましたが、軽い仕事でも、もう少し体力と時間の余裕が出来てからにしたいと思います<sup>45</sup>。

もっとも、学費や生活費に関するやりくりの状況は光三郎の留学期間において刻々変化していき、渡米二年目を迎える頃になると奨学金をはじめ複数の収入源・支援先を見つけている：

・・・六月三日、ビ氏夫妻がロスに帰られましたので、毎日一緒に各所を歩いております。〔1956年の〕夏期授業料はスカラシップがありませんが、ビ先生が九十ドル（五単位分）出してくれる事となりました。来年度も授業料はスカラシップをもらいましたし、又ロータリー〔クラブ〕より援助があり、結局学校には一ドルも払わずとも良い様です。生活費が百ドル、少し苦しいですが、まー安定していますので、出来るだけ勉強と米人との交際に効果を上げるべく努力しています<sup>46</sup>。

このように、経済的支援に言及している際に「ビ氏」から「ビ先生」に呼称を変化させるなど、この時期には二つの呼称が混在することも見られた。

留学してから一年が経過するころには、空港のレストランで皿洗いのアルバイトをするなどした結果、光三郎の経済状況に余裕が出てきたようである。しかし、支援者であるビックスラーには、自分が経済的に余裕を持っていると思われたくないとの本心もあったようで、そのことを両親に吐露している。

銀行預金も600ドルを超え余裕をもって生活をしておりますが、この金の事に関してはビ先生には全く微妙で、余裕がある等と云ったら援助を切られてしまいますから一切内緒にて、お父さんお母さんの胸の中にだけしまっておいて戴きます。この程度の余裕は体の為にも、勉学の為にも全く最低限のものでありますから、教会関係からの援助を東京で横取りされてしまつてはハンディキャップのある小生には当地の生活は不可能です。先日鈴木君から百二弗の小切手が送られました。米国人から直接ビ先生を通さず、寄付を受けたものを廻してくれたのですが、〔先に帰国した〕鈴木君からの注意にて之も”ビ先生には一切（伝えない）様にとの事ですから、鈴木君が来た時、彼にだけ良く礼を言って下さい<sup>47</sup>。

一方、光三郎が渡米してから半年程経ったころには、ビックスラー自身の経済状況が悪化していた時期があった。その状況は、光三郎と共にジョージ・ペパダイン大学に留学し

ていた鈴木通夫が運営し、ビックスラーも支援していた茨城のチルドレンズ・ホームにも影響を及ぼしていたようで、光三郎も以下のとおり気にかけていた：

額田〔のチルドレンズホーム〕も借金（三十万円位）の肩代わりが出来ず、苦勞のあまり石川さんが倒れてしまったとの事です。又、二人の孤兒の渡米の件も、小生宛、米大使館より不許可の通知がありました。・・・何しろビ氏夫妻が之の問題には全く消極的ですので困ります<sup>48</sup>。

こうした経済的状況の結果、鈴木通夫は当初の留学予定が3年間であったところ、半年で切り上げて1956年4月末に帰国することになる。そして、その留学自体の意義もあまりなかったというのが光三郎の見解であった：

此度、鈴木がこの三十日飛行機にて帰国する事になりました。毎日毎夜二人で語り合いましたが、色々の事情から、結局帰る事になりました。・・・此度は鈴木としては精神的にも・・・大した収穫もなく、帰りの飛行機賃も虎の子のニコン・カメラを売って造る位、ろくな土産も買えず、全く気の毒です<sup>49</sup>。

光三郎自身に関して言えば、留学が三年目で佳境に入る頃、思わぬ時に敬愛して止まなかった父親・猛の訃報に接することになる。1957年12月27日、71歳の早すぎる死であった。光三郎の驚きと深い悲しみは、父の追悼集に「遙か海をへだてた異国にある私にとって、帰国の余暇さえあたえぬ父の急死は正に霹靂の如き衝撃でありました。父を失った人間の悲しみは私に残された異国での研究課程を正に灰色の砂漠への途と化するに充分<sup>50</sup>と記すほどであった。

#### 4) 帰国後：啓明学園での山崎光三郎とビックスラー

山崎光三郎は、1968年に逝去したビックスラーの追悼文集に「放蕩息子の悔み」と題した追悼文を寄せている。その題には、かつて病に臥していた際にビックスラーの励ましを受けて「新しい人生」が与えられたと感じていた光三郎が、その恩に報いることができなかったとの後悔の念が込められているという。後悔の理由は様々で、「或いは米国留学問題について、或いは結婚について、或いは衆議院選挙出馬問題<sup>51</sup>で、或いは啓明学園防音校舎建設問題で等々、次から次へと信仰上潔癖に徹しておられたB先生の心を痛める放蕩息子となってしまった」と記されている<sup>52</sup>。防音校舎建設問題とは、米国から帰国後の山崎光三郎が、ビックスラーが1951年から理事長を務めていた啓明学園に奉職したことに端を発している<sup>53</sup>。ベトナム戦争の最中であった1965年、啓明学園に程近い米軍横田基地から飛び立つ飛行機の騒音で、啓明学園の授業は何度も中断を余儀なくされたという。そのことを教職員のみならず生徒とPTAがこぞって問題視し、光三郎が防音校舎の建設計画を立ち上げたのであった。しかし、かつて御茶の水教会がテナントスペース付きビルを建てることに反対したのと同様、ビックスラーは建設に大反対で、光三郎と対立したという。最終的にはビックスラーが妥協して建設を認めるに至っているが、その過程においてビックスラーの心を大きく痛めたことが光三郎の後悔につながったのであった<sup>54</sup>。

光三郎が付けた題にある「放蕩息子」は新約聖書に登場するイエスの譬え話であるが、ビックスラーとの関係において自分を「息子」と表現することは、宣教師との関係におけ

る父権主義と依存の関係性を想起させる。留学中に両親に宛てて書いた手紙ではビックスラーに対する批判をためらわなかった光三郎であったが、ビックスラーの死に接して、改めてビックスラーと自分の関係を次のように記している：「B先生が時に私共の理解を超えて偏狭なまでの頑固さをしばしば示されたのは、神の御旨にあくまでも忠実であらんとされたからであった。そして放蕩息子の行いの責を自ら負わんとされたのだ」<sup>55</sup>。

#### 4. おわりに

本稿で主に検証したジョージ・ペパダイン大学留学時代の山崎光三郎とビックスラー宣教師夫妻の関係性は、基本的には経済的に支援するビックスラー宣教師夫妻とその支援を受ける光三郎という枠組みの中にあり、そこには宣教師と受け手との関係性における父権主義と依存という不健全な構図も見え隠れしている。しかし、光三郎の手紙を中心とした上記の検証から明らかになったことは、この構図に引かれているはずの境界線が決して不動・明確なものではなかったことである。むしろ、数ある光三郎の書簡から垣間見えるのは、時に弱く、怖気付き、感情的になりやすい宣教師夫妻の姿でもある。また、自分に対する宣教師の願いを認識しているにもかかわらずそれをはぐらかし、また時には冷静な視点で宣教師夫妻を見つめるポストコロニアル的な光三郎の姿も見られた。とは言え、光三郎のビックスラー宣教師夫妻に対する姿勢は一貫した批判・はぐらかし・嘲笑であったわけではない。ビックスラーの追悼文集に掲載された光三郎の文章は、あたかも父権主義と依存のゆりかごにあえて自らを引き戻すことを欲したようにも思えるものであった。総じて言えば、結局のところここに見た宣教師とその受け手との関係性は一つのパターンに固定できるものではなく、常に流動的なものであったと言えるのではなかろうか。

なお、本稿ではアーカイブス調査を主な方法論としたが、あくまでも光三郎という一人の人物を中心に検証したに過ぎず、しかも留学という特定の時期に検証は集中している。また、光三郎との関係性において重要な役割を果たしていた可能性もあるディライラ・ビックスラーについてここでは深い検証ができなかった。今後は、より多くの宣教師とその受け手を対象に関係性を検証していくことが必要であろう。

- 1 本稿の執筆にあたり資料閲覧でお世話になった茨城県立歴史館、宣教師ビックスラー夫妻と山崎猛・光三郎両氏との関係についての質問に答えてくださった廣野富雄氏と平塚秀雄氏、資料を提供してくださった平塚雄三氏に心から感謝の意を表します。なお、本稿において引用する同歴史館所蔵「山崎猛関係資料」は、その資料番号と共に「山崎猛関係資料」625等と表記することとする。
- 2 例えば以下を参照：Kim Young, “Paternalism, Dependency or Partnership?: A Case Study on the Reformed Churches in South Africa,” *Missionalia* 47 (3) 2019, 303-318; Scott W. Sunquist, *Understanding Christian Mission: Participation in Suffering and Glory* (Grand Rapids: Baker Academic, 2013), 381-382.
- 3 Dana L. Robert, *Christian Mission: How Christianity Became a World Religion* (Chichester, UK: Willey-Blackwell, 2009), 92.
- 4 ホミ・K. バーバ『文化の場所：ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也他訳、法政大学出版局、2005年、169-171頁。
- 5 「ディサイプルス派」(Disciples of Christ), 「キリストの教会(有楽器派)」(Christian Churches and Churches of Christ), そして本論でとりあげる「キリストの教会」(Churches of Christ)の起源であるストーン＝キャンベル運動については以下を参照：Foster, Douglas A.

- Foster, et al., eds., *The Encyclopedia of the Stone-Campbell Movement* (Grand Rapids, MI: Eerdmans, 2004); Newell D. Williams, Douglas A. Foster, and Paul M. Blowers, *The Stone-Campbell Movement: A Global History* (St Louis, MO: Chalice Press, 2013).
- 6 幼稚園, 小学校, 中学校, 高校を擁する学園。同窓会作成のPDF資料にビックスラーに関する記述がある。 <https://keimei.sakura.ne.jp/p5-3s.pdf>
  - 7 平塚秀雄氏より筆者への電子メール (2024年9月16日受信); Lonnie and Nola Vanderveer, "Some People I Like to Remember" (written on June 13, 1975), オー・デー・ビックスラー先生を偲ぶ』(御茶の水キリストの教会, 1985年), 175-185。
  - 8 山崎猛の略歴は以下を参照: 『故 山崎猛先生をしのぶ』山崎会, 1958年; 市村眞一「没後六〇年・山崎猛を彫琢する: 幻の首班指名を軸として」『茨城県近現代史研究』創刊号, 2017年, 68-84頁; 酒井邦子「山崎猛」, 『茨城県大百科事典』茨城新聞社, 1981年, 1041頁。
  - 9 視察の内容は以下を参照: 『アメリカより帰って: 渡米議員団長 山崎猛講演』茨城県町村会, 1950年; 近藤英明『市民と議会: 議員団訪米記』コスモポリタン社, 1950年。
  - 10 「山崎猛関係資料」228。
  - 11 市村眞一「没後六〇年・山崎猛を彫琢する」, 68-76頁。
  - 12 石井裕「吉田茂の書翰—山崎猛関係資料 (小林家文書) から」『茨城県立歴史館報』45号, 2018年, 65-76頁。
  - 13 川又一英『麻布中学と江原素六』新潮社, 2003年, 117-126頁。
  - 14 五明忠一郎「山崎猛兄を偲ぶ」『故 山崎猛先生をしのぶ』山崎会, 1958年, 26頁。
  - 15 このメモにある聖書引用は明治元訳による。聖書 (新共同訳) では以下の通り: 「26 イエスは答えて言われた。『はっきり言うておく。あなたがたがわたしを捜しているのは, しるしを見たからではなく, パンを食べた満腹したからだ。 27 朽ちる食べ物のためではなく, いつまでもならないで, 永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ, 人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が, 人の子を認証されたからである。』」
  - 16 山崎猛手書きメモ (日付未記載)「山崎猛関係資料」344。
  - 17 E. W. McMillan, "The Voice of Opportunity from China and Japan" (1948), 22-23. Available at: [https://digitalcommons.acu.edu/crs\\_books/](https://digitalcommons.acu.edu/crs_books/).
  - 18 山崎光三郎「放蕩息子の悔み」『オー・デー・ビックスラー先生をしのぶ』御茶の水キリストの教会, 1985年, 91頁。
  - 19 『慈しみ深き歳月: チルドレンズ・ホーム創立65周年記念誌』参照。
  - 20 箕川恒男『天衣無縫を生きて: 県政の影武者 鈴木通夫の証言』那珂書房, 2004年, 88頁。
  - 21 箕川恒男『天衣無縫を生きて』, 84頁。
  - 22 「山崎猛関係資料」609
  - 23 "Youth Leader, Orphanage Director Here From Japan" *Graphic* (14 October 1955), 3 (<https://pepperdine.quartexcollections.com/Documents/Detail/the-graphic/93104?item=94843>) (拙訳)。この新聞記事の切り抜きが, 以下の手紙の封筒内にある。山崎光三郎から山崎猛への書状 (1955年10月22日)「山崎猛関係資料」637。
  - 24 山崎光三郎から山崎猛・隆子への絵葉書 (1955年11月14日)「山崎猛関係資料」610。
  - 25 前掲「山崎猛関係資料」637。
  - 26 山崎光三郎から山崎猛・隆子への書状 (1956年4月25日)「山崎猛関係資料」628。
  - 27 山崎光三郎から山崎猛・隆子への書状 (1956年10月6日)「山崎猛関係資料」618。
  - 28 山崎光三郎から山崎猛・隆子への書状 (1957年8月6日)「山崎猛関係資料」584。
  - 29 山崎光三郎から山崎猛・隆子への書状, ビックスラー夫妻の添書付 (1957年9月10日)「山崎猛関係資料」583。
  - 30 山崎光三郎から山崎猛・隆子への書状 (1955年11月28日)「山崎猛関係資料」635。
  - 31 山崎光三郎から山崎猛・隆子への書状 (1956年6月13日)「山崎猛関係資料」626。
  - 32 山崎光三郎から山崎猛・隆子への書状 (1956年6月15日)「山崎猛関係資料」624。
  - 33 山崎光三郎から山崎猛・隆子への書状 (1956年6月19日)「山崎猛関係資料」623。
  - 34 Mr. and Mrs. Bixlerから山崎猛・隆子へのクリスマスカード (1956年12月24日発送)「山崎猛関係資料」614 (拙訳)。
  - 35 Beth Bixlerから山崎猛・隆子への書状 (日付未記入)「山崎猛関係資料」604 (拙訳)。
  - 36 山崎光三郎から山崎猛・隆子への絵葉書, O.D.ビックスラーの添書付 (1957年9月9日)「山崎

- 猛関係資料」581（拙訳）。
- 37 Paul Yamazaki〔光三郎のアメリカでの名前〕からMama Beth & Dada Bixlerへの書状（1956年12月19日）「山崎猛関係資料」612。
  - 38 Paul Yamazaki〔光三郎のアメリカでの名前〕からMama Beth & Dada Bixlerへの書状（1957年3月16日）「山崎猛関係資料」600。
  - 39 山崎光三郎から山崎猛・隆子への書状（1956年12月27日）「山崎猛関係資料」603。
  - 40 山崎光三郎から山崎猛・隆子への書状（1957年3月25日）「山崎猛関係資料」595。
  - 41 山崎光三郎から山崎猛・隆子への書状（1956年12月27日）「山崎猛関係資料」603。
  - 42 Paul Yamazaki〔光三郎のアメリカでの名前〕からMama Beth & Dada Bixlerへの書状（1957年1月8日）「山崎猛関係資料」607。
  - 43 Paul Yamazaki〔光三郎のアメリカでの名前〕からMama Beth & Dada Bixlerへの書状（1956年12月19日）「山崎猛関係資料」612（拙訳）。
  - 44 山崎光三郎から山崎猛・隆子への書状（1956年3月31日）「山崎猛関係資料」629。
  - 45 前掲「山崎猛関係資料」635。
  - 46 山崎光三郎から山崎猛・隆子への書状（1956年6月8日）「山崎猛関係資料」627。
  - 47 山崎光三郎から山崎猛・隆子への書状（1956年10月6日）「山崎猛関係資料」618。
  - 48 山崎光三郎から山崎猛・隆子への書状（1956年3月31日）「山崎猛関係資料」629。
  - 49 山崎光三郎から山崎猛・隆子への書状（1956年4月25日）「山崎猛関係資料」628。
  - 50 『故 山崎猛先生をしのぶ』山崎会，1958年，33頁。
  - 51 山崎光三郎は、1960年の衆議院議員選挙に民主社会党から茨城2区で出馬したが落選している。
  - 52 山崎光三郎「放蕩息子の悔み」『オー・デー・ビックスラー先生をしのぶ』御茶の水キリストの教会，1985年，91頁。
  - 53 啓明学園で教員として長い間務め、山崎光三郎を知る廣野富雄氏は、山崎光三郎は早稲田大学で政治学を修めた知識を活かして初めは社会科教員として教え、後には事務の大きな働きもしたと述懐している（廣野富雄氏談，2024年9月18日，御茶の水キリストの教会にて筆者によるインタビュー）。
  - 54 山崎光三郎「放蕩息子の悔み」，91-92頁。
  - 55 前掲，92頁。

Ambivalence in the Relationship Between American Missionaries  
and Japanese Individuals during the Post-World War II Era:  
The Case of Orville D. and D'Lila Beth Bixler Interacting with the Politician  
Takeshi Yamazaki and His Family

Yukikazu OBATA

In this paper I investigate the relationship between US Churches of Christ missionaries Orville D. and D'Lila Beth Bixler and the family of the Japanese politician Takeshi YAMAZAKI, who was at one time the Speaker of the House of Representatives in Japan. The investigation is done through the analysis of archival materials available at Ibaraki Prefectural Archives and History Museum. The materials in the Takeshi YAMAZAKI collection contain letters and postcards written mostly by Kozaburo YAMAZAKI, the son of Takeshi YAMAZAKI, or the Bixlers. Kozaburo, who studied at George Pepperdine University in mid 1950s, was financially and spiritually supported by the Bixlers. The relationship between the Bixlers and Kozaburo, however, does not simply fall into the scheme of paternalism/dependency; rather, the line that separated the supporter and the beneficiary was often fluid. It was so, partly because Kozaburo's father was a notable politician in Japan. Kozaburo's incisive observations of the Bixlers and American Christianity also helped to blur the line.